

ほっこまい伝

妹尾隆彦 著



ほつこまい伝



創元社

ほっこまい伝

著者略歴

- ・大正9年、香川県丸亀市に生る。
- ・剣道錬士、居合道教士。
- ・著書「カチン族の首かご」文芸春秋新社発行。
- ・現職：大阪市港湾局管理部
- ・現住所：大阪市港区八幡屋宝町3の1
八幡屋住宅F号館404号室

昭和四十一年十月一日 初版発行

定価 四八〇円

◎著者 妹尾隆彦
せ お たか ひこ

発行者 矢部良策

印刷者 角森印刷株式会社

大阪市北区樋上町四五

発行所 創元社

振替口座 大阪五七〇九九番

電話三六三一二五三一(代)

東京営業所 東京都新宿区神楽坂六ノ七三

電話二六九一一〇五一

落丁・乱丁の場合はおとりかえいたします

第一部

目次

大寄せ	一
父祖の血	九
三千本稽古	一六
青雲	二六
四十七士	三八
確執	四九
松吉	五五
サト	六一
俄か俤夫	六六
人力車	七一
神経衰弱	八〇
赤い手絡	八五

農民騒動	……	一九七
花火	……	二〇六
鐘	……	二一五
崩壊	……	二二一
オヤジ	……	二三一
欧打事件	……	二三七
ゴロ新聞	……	二四六
道場建設	……	二五四
四面楚歌	……	二六三
△おもちゃ▽の出現	……	二七二
満洲行	……	二八〇

11

大 寄 せ

二三日、急に襲った肌締る寒さがまるで嘘のように、湿った藁ぐらや黒い田の面が暖かい陽光を艶々しくうけて湯気をたてている小春日和の朝だった。

早朝から山裾をまわって聞える太鼓の音に誘い出されて、着飾った子供たちを先頭にした百姓たちが、点在する農家から姿を現わし、畦道を列になつてへ繋ぎ山へ向つて行く。目尻に沁みるほど晴れ渡つた紺碧の空に、そこだけ染め忘れたような白い奉納幟がはためいていた。

「檀紙の大坊ンちゃん」

背戸の小川で赤塗りの木碗を洗っていた小母ンが、両の筒袖に手を入れて駈けぬける子供の姿を目ざとく見つけて声をかけた。

「坊ンも、繋ぎ山へ行きよるンな。うちの子は、もう早よから行とるでエ」

話しかける間も敏捷に動く手もとをくぐつて、大根葉の切れ端がゆっくり廻転しながら流れて行く。

彦三郎は、仕方なく立ち止つた。このような日に、小作男の女房から声をかけられるのは、身が縮む思いがする。祭りがきてもへ着たきり雀の、紐のない羽織が氣になるのである。地名で名を呼ばれるほどの大地主の息子が、祭りの晴着も持っていないのは恥かしい。

「ほんでもまッ、あのお母ンが、よう出してくれましたなッ。祭りじゃけん、きょうぐらいはゆ

つくりさして貰わなのオ。……温くとい日じゃ、よう遊んできまアえ」

継母が親戚の客に招かれ、異母弟妹を着飾らしていそいそと出かけるのを待って、いまやつと抜け出て来たところである。

際限もなく続こうとする小母の饒舌を背に、彦三郎は、藁草履をばたつかして再び田の畦を駆けだした。昨夜の夜なべに作男の吾平爺が作ってくれた手製の藁草履だけが、祭りの衣裳である。追われて小川に小さいしぶきをあげた蛙が、四肢をひろげたまま動かず、澄んだせせらぎに身をまかして流されて行く。

いつの祭りにもそう思うのであるが、かれは（おらは、大きくなったら衣裳持ちになって見返してやる。一生ボロ着物はずんぞ！）

と、朝露に艶よく光る畦の草を踏みわけて走りながら、齒がみして反芻した。

かれが祭りたびに誓いを新たにすることは、も一つある。生涯麦飯を食わぬ身分の男になることである。明治も半ばを過ぎていたが、一般の農家は、八米飯を食えば家が栄えぬと云って、麦を常食としていた。それも盆・正月・祭りなどの祝い日には米を炊く。しかし岡田家は、主婦の指図で祝い日も麦飯である。だが継母自身は、麦をいれた大釜の隅に白米を片よせて共に炊き、父や異母弟妹と一緒に食うのだ。祝い日の味噌汁も平常と変わらず、チシャ・畦豆・麦粉団子の実である。稀に入っている炒り雑魚でも見つけようものなら、浅ましく罵って奪い合う異母弟妹を、彦三郎は傍観するだけであった。村では数百石を嚙まれる岡田家が、このように儉しく暮す必要はないのだが、生来吝嗇な継母が贅沢を許さないのだ。自分たち以外が白米を食うのは贅沢だと考える継母

のドグマが、子供心に憎かった。發育盛りのかれは、作男と同じ麦飯をのみこみながら、（おらは一生、麦飯を食わん。麦飯を食わぬ男になってみせるぞ！）と幼い心に固く決心するのだった。

目ざす繋ぎ山は、平地にこんもり盛り上った小山で、山裾に密集した家々はそれぞれ黛（かまど）を持ち、部落には松葉を焼く匂いが四六時中充満している。瓦や土器をつくる良質の粘土が採れるので、山の一方は削ぎ取られた赤肌を出していた。

ほんとうは八津内山Vというのだが、村人たちが昔から八繋ぎ山Vで呼び慣れているこの小山は、いまは何里も海から離れているが、その昔神功皇后が三韓征伐のおり、船を繋いで休息したところから、その名があった。山の頂上にある小さな祠（ほくら）は靈驗あらたかで、定まった堂守もないのに、村人たちの内面生活を強く支配している。

おどろおどろに膚を顫（ふる）わせて近く聞えだした太鼓の音に胸躍らしながら、着飾った人波に混って、彦三郎は、かたちばかりの石段をのぼって行つた。

バカでかい石の鳥居をくぐると、極彩色の布で飾った露天のテントが続いて、脹（ふ）らんだ百姓たちの懷を声を限りに呼びこんでいた。

咽喉の奥がひくひくするような匂いを発散させているスルメ烏賊（いか）、粉をはいた板の上に形よく並べられた羽二重のような肌の中納言餅、竹筴（たけがし）にこぼれるほど盛った川蟹、杭から杭へ張り渡した繩に立てかけて売っている砂糖黍、竹の鞭音に合わせ節面白く調子をとっているのは人のぞきからくりVである。

子供たちが群がって動かぬこれらの店の前を、彦三郎は、少しの関心も示さず、急ぎ足で通り過

ぎた。

露店の雑踏を外れた空地に、固唾かたずをのんだ群衆に囲まれて静まる一隅を見出すと、彦三郎の小さな心臓は、コトコト鳴った。重なりあう人輪の中から、激しく撃ち合う音や裂帛れっぱくの気合を聞きとると、かれの全神経はその方向に集中して、足がひとりでに宙を踏むのである。

彦三郎の目ざしたものは、祭りの太鼓でも人のぞきからくり▽や露天店でもなく、この一群だったのである。

そこでは、撃剣の△大寄せ▽が催されていた。

村の辻々に四五日前から貼り出されている案内を彦三郎も見て知ってはいたが、人々は、別に、貼り紙で△大寄せ▽のあることを知る必要はなかった。山田の法泉寺で法会の行なわれる日、一ノ宮の田村神社の祭礼日など、神社仏閣へ人の集まる日に行きさえすれば、そこには必ず撃剣の△大寄せ▽があつた。そのような、いわば晴れの場所では近郷の部屋持ち（道場主）が大会を主宰したが、何一つ娯楽のない田舎のことなので、祭礼や法会を待ちきれない村の若い衆たちによって、準場所ともいうべき撃剣大寄せも、しばしば催された。

試合は、通例、十時か十一時にならねば始まらないので、早朝から集まった若い衆たちは、それぞれの師が姿を現わすその時刻まで地稽古をしながら待つのであるが、とり囲んで見守る村人たちは、若い衆たちの稽古ぶりを指さして△ニワトリの蹴合い▽をでも見に来たように、選士の優劣をてんでに下馬評し合うのである。

人垣の間をくぐってやっと最前列へかき出ることのできた彦三郎は、世話人たちが大福帳のよう

な綴じ紙をくって協議しているのを見て、安堵の胸を撫でおろした。試合開始に間に合ったのである。

世話人たちは、綴じ紙に部屋別に書き出された選士名簿をめくって、きょうの組合せを協議しているのである。少年は、世話人の群れの中から背の高い△石屋の源やん▽の姿を見つけ出して嬉しくなった。

かれがいなくては、せつかくの試合も、面白さが半減する。かれは、墓石を刻むのを本業とする三十まえの、痩せて頬骨の出た、頼まれれば石碑でも地藏さまでも器用に彫りあげる剽軽者ひょうきんものであったが、撃剣の行司にかけては既に定評がある。好取組の行司を他の者がつとめようものなら、「源やんを出せ」と云って群衆が喚わめいて承知しないので、どこの大寄せにもよばれて行ったが、誰もかれが竹刀を握った姿を見た者はない。つまり、かれ自身は、撃剣をしたことがないのだ。しかし、角力の行司と同じように、当時の撃剣の行司は、必ずしもその道の強豪であることを要求されはしなかった。源やんのように、勝敗判定の公平な判断力と、当意即妙な機智と、人柄からにじみ出る人気さえあれば、群衆の満足を得たのであった。だから反面、誰にでもつとまるといいうわけのものではなかった。

羽織・袴に威儀を正して扇子を持ち、紙緒をきりりとした草履を白足袋の爪先についと挟んで立った姿は堂々としていて、日頃の源やんを想像できぬほど立派であった。

選士たちは既に地稽古をやめて、面を脱ぎ、神妙に控えている。

突然、ざわめきが起った。

注目をあびて源やんがしずしずと中央へ進み出て行くのだ。

「東西、とォざァーい……」

試合の開始が宣告され、日の丸の朱色も鮮やかな扇が源やんの顔の横ではらりと開かれた。

「ひがァー、御厩みまの清五郎……にィィ、円座の喜八……」

呼び出されて神殿に礼をした二人の選士が、面の中に上気した顔を向かい合つて立つと、人々はびたりと私語をやめ、地稽古の下馬評で既に興奮した熱っぽい目を注いで見守つた。

たがいに間合をとつて抜き合わされた竹刀が交叉する八中括りはちちく∨の上を、気合の充分満ちるのを見はからつた源やんが、扇子の先でほんと叩いてきっぱり宣言する。

「勝負、三本！」

鳴りをひそめていた群衆は、このときを待っていつせいに喚きだし、各人の鼻肩ひじかを力の限り声援しはじめるのである。

源やんは、奮闘する二人の周囲を身軽く跳びまわり、細心の注意をはらつて誤審のないよう眼を配っている。技が決りそうになるたび群衆は息をのむのであるが、大きい音がしたのに撃突を許された箇所を外れていたりすると、そくさに扇を開き、

「浜の松風、音ばかァーィ……」

と、身振りおかしく告げて満座をどツと湧かす。

源やんが撃剣の行司として絶対的人気があるのは、このような即興の句が尽きることなく当意即妙にとびだすからである。

勝者は、源やんが開いた扇の上にのせて忝々しくさしだす「賞」と大書した紙包みをいただくのであるが、中には、一錢五厘の△官製はがき▽が一枚入っているだけである。

彦三郎は、人垣の最前列に蹲^{つくば}って、眼前に展開する剣気の渦に酔った。この渦の外にある祭りの喧騒や雑踏は、所詮かれにとっては無縁のものでしかなかった。どよめきの間に轟く太鼓の音も、興奮をいやがうえにも充める伴奏以外の何ものでもなかった。かれは昼食も忘れ果て、喰いいるように見開いた眼を一つ一つの試合に向け続けていた。

中入り（中間休憩）後は、いよいよ呼びものの紅白に分れて競う△抜き試合▽である。五人六人と勝ち進む者に対しては、勝敗の如何にかかわらず、猛烈な拍手が湧いた。

勝ち残った者には、△○人抜き▽と墨書した紅白いずれかの紙を吊った竹竿が渡される。障子紙を截^きってつくった紙片を一メートルほどの細い雌竹に結びつけた変哲もないものであるが、道具の籠^{こて}手に古武士が箆^{えびら}にしたように差して担ぎ、意気揚々と引き揚げる姿は、なかなか粋^{いき}で、風情があった。選士たちは、一錢五厘の賞よりは、この紙片を奪い合うために精魂を傾けた。帰途出会う村の娘たちが

「あら、ちょっと、見てンまアえ。あの若い衆は○人も抜いたと、へーえ……」
と、袖ひきあって眩^{まぶ}しげな眼を向けるからでもある。

△抜き試合▽が終ると、師範たちの模範試合が行なわれる。古稀をすぎた老人たちもすすんで竹刀をとり、枯れ尽した妙技を虚心に披露して参観者に感銘を与えた。上段に構える場合は、目下の者に対しても必ず「ご無礼を……」と挨拶し、撃たれれば深く●頂戴しました」と声をかけて、気

品ある試合の模範を示すので、撃剣ちゆうもんは見ているだけでも清々^{すがすが}しい気になるもんじゃ、と

感服するのである。現代のことばで云えば、△大寄せ▽は、ストレス解消のレクリエーションとして一服の清涼剤になるばかりでなく、村人の内面生活に節度をつける役割をも果していた。

演武が終る頃には、参会者が持ちよった米が、村の女房たちの手によって、腸^{はらわた}に沁みわたる匂いの湯気を噴いて、炊き上っている。汗を拭き終った演武者たちは先刻までの闘志を棄て、参観者とともに釜のまわりに集まって、和氣藹々^{あいあい}とした談笑のうちに大根の漬物で茶飯を食うのである。

酒や折詰めなど贅沢なものは一切ないが、彦三郎少年は、大人たちに混ってよばれるこの粗末な会食が何よりも嬉しかった。先輩たちの話を聞きながらかきこむ茶飯は、無限の力を少年に与えるもののようにであった。

立ち並ぶ藁ぐろが田の面に長く影を曳いて、向山^{むこうやま}の背に沈む太陽がその日の終りの真赤な光芒を投^なげている。

少年は、意地悪く歪んだ平べったい継母の顔を思い、意外なほど早く落ちる秋の陽を気にしながら、家路を急いだ。

かれの頬は、夕陽をうけたせいばかりではなく、まだ醒めやらぬ興奮の酔いに、赤く染まっていた。かれは、きょうの奉納試合を思い返していたのである。そこには、いつの試合にも目立って強い若者の一団が、きょうも姿を見せていた。勝ち残って行くかれらの粗末な竹胴には、白で師のしるしが書かれてあった。

「おじさん。あれは、どこの若い衆な」

かれは、隣の男に聞いてみた。

いづれ数里離れた在から大寄せ見たさに歩いて来た者であろう。彦三郎の素姓に気づかぬ男は、身なりのよくない子供に遠慮のない声で答えた。

「知やんのか、おまえは……あれはの、師範学校の生徒さんじゃ。……減法強いやないけ……」
 師範学校とは何を教わる学校か、かれには見当もつかなかったが、もし上の学校へやって貰えるならば、あのように撃剣の強い学校へ行きたい、と思った。しかし、因業な継母のことを考えると、それも夢^{はかな}い夢でしかないことを思い当らねばならなかった。

かれは、俯^{うつ}むいて小石を力まかせに蹴とばすと、思いかえして家路を駆けた。

父 祖 の 血

月の冴え渡った晩である。白々と光る広い中庭を囲んでコの字型に建つ長大な藁葺きの棟々は、刻限も早いのに、ひっそりと静まり返っていた。時々しじまを破るのは、厩^{うまや}で馬が板を蹴っている音である。いつもなら薄暗い灯の下に蠢^{うごめ}く作男たちが夜なべ仕事に精をだしているのだが、さすが祭りの夜だけに、今夜は休養が許されていた。しかし、燈油の節約に喧ましい主婦の云いつけで、ランプの灯は陽が落ちるとすぐ消され、日頃の酷使に疲れきった作男の大部分は、既に眠りこけていた。

「吾平爺……もう、寝たン」

カビ臭い布団の一つがもそもそ動いて、あたりを憚る^{はばか}子供の声がした。

「うんにゃ、起きとるで……」

吾平は、三代続いてこの家に奉公する作男頭である。いつの頃からか母屋^{おや}で寝るのを嫌がつて、作男部屋のかれの寝床へもぐりこんでくる彦三郎にせがまれるまま、寝つくまでのひとときを、寝物語をして聞かせるのが習慣になっていた。

大寄せを見てきた興奮からまだ醒めきれぬ子供は、爺の寝入っていないのを確かめると、嬉しそうに小さなからだをすりよせてきた。

「うちのお父さん、ほんとに、撃剣強かったン」

「ああ、強かったでエ……」

暗がりに見開いた眼で母屋の方角を睨み、吾平は、いまでは別人のように変ってひっそりと余生をおくる当主のことを思った。

「坊ンは、山田村の吉田という先生を知つとるのォ……讃岐では一二を争う達人じゃ」

「うん、知つとる」

綾歌郡山田村に門弟五十余名を住まわした大部屋を持つ淳風館主吉田仙次の名は、子供でも知っていた。

「おまんのお父さんとは十四も年上じゃが、その先生と試合して、お父さんは△胴▽を二本ともとつてしもうたンじゃ。無念がつて、もう一本と迫ってくる吉田の、今度も△胴▽を見事奪うて見

せた。達人に一本もとらさず、それも同じ△胴▽を三本も奪うたおまんのお父さんは、撃剣の名人じゃった……」

既に何度もせがまれて聞かせた話なのに、そのたび、子供は眼を輝かすのである。

「口惜しがった吉田は、日を違えて再度手合せしよう、と何度も申し入れたが、おまんのお父さんは、その日から剣を棄ててしもうたのじゃ……」

生来鬭争的でなかった当主五三郎が、「このようなことで仇^{かたき}を作るのは好まぬ」と云い残し、ある日、突然、出奔したことは子供には話していない。

数年間行方の知れなかった当主は、九州にいた。九州の炭坑で、坑夫の生活を送っていたのである。

帰郷したのちの五三郎は、別人のように変容していて、宗教の世界に没入し、再び剣をとろうとはしなかった。当主は邸内に祈禱所を造り、田作りを主婦や作男に任して祈禱三昧の日々を暮している。天賦の資質があったのか、突如として神通力を授かったのか、かれが五穀豊穡を祈るときは他所が凶作のときもこの村だけ豊かな収穫があったり、雨を乞えば、旱魃^{かんばつ}の期にこの村だけに雨が降るといふ奇蹟をいまも行なう。邸のまわりに建てられた多くの石碑は、かれの徳を贅えて村人が建立したものである。

「お爺さんも、強かったンじゃなア……」

「そうじゃ、お爺さんも強かった。△突き▽の名人でのオ、わしも若いとき、おまんのお爺さんが家の中で△独り稽古▽をしとるのを、よう覗き見したもンじゃ。天井から落ちてくる毬^{まり}を刀を抜いて突きさすンじゃが、千に一つの狂いもなかったぞい」